



Title	「北方的」なるものをめざして：北方研究教育センターの創設期と今後
Author(s)	津曲, 敏郎
Citation	北方人文研究 = Journal of the Center for Northern Humanities, 11: 111-117
Issue Date	2018-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/70079
Type	bulletin (other)
File Information	11_07_tsumagari.pdf



[Instructions for use](#)

「北方的」なるものをめざして — 北方研究教育センターの創設期と今後 —

津曲 敏郎

(北海道大学名誉教授／北海道大学総合博物館資料部研究員)

1 センター設立に向けて

十年一昔というが、十年を一つの節目として来し方を振り返り、新たな行く末に思いを馳せるのは、何事につけその発展のためにあながち無意味なことではなからう。北方研究教育センター（以下、センター）の設立にかかわった者の一人として、立ち上げの経緯と創設期の活動について、いささか個人的な視点をまじえながらあらためて振り返るとともに、センター（および研究科）を離れた立場から今後への期待などを述べてみたい。

1966（昭和41）年、文学部に設置された北方文化研究施設は、95（平成7）年の文学部改組にともなって廃止され、北方文化論講座へと引き継がれた。ほぼ30年におよぶ施設時代の研究成果の一端は、施設廃止とともに廃刊となった『北方文化研究』誌全22号からうかがうことができる。同誌には、施設を構成した考古学・文化人類学の両部門の研究を中心に、言語学・歴史学などの論考が並んでいる。施設を引き継ぐかたちとなった北方文化論講座には、その後98（平成10）年に民族言語学分野担当教員として津曲が着任した。「北方」への学際的アプローチを看板に掲げて再出発した北方文化論講座であったが、研究教育両面において学際的理念と個々のディシプリンの両立は必ずしも容易ではなく、まして一講座の立場で学部・研究科全体の北方研究をリードする役目を担うこともむずかしかった。

言うまでもなく、北大として北方研究は文理を問わず大きな柱であり、文学部・文学研究科においても各分野でそれぞれ北方に縁のある研究が行われてきた。しかし、北方文化研究施設（および『北方文化研究』誌）なきあと、それらを統合し対外的に「北方研究の拠点」をアピールできるような場が失われた感は否めない。一方で、人骨問題を一つの契機に旧来の北方研究の負の側面の反省をも踏まえ、あらたな視点での北方研究の構築と展開を求める機運が高まりつつあった。そんな中で、2006（平成18）年4月 文学研究科「特色ある研究教育プロジェクト」として「北方研究の構築と展開」が申請され、採択された。北方文化論講座の4教員をはじめ、芸術学、西洋史学、歴史文化論、西洋文学、言語情報学、地域システム科学の各講座教員がメンバーに名前を連ね、津曲が代表にあたった。旧来の枠組みを打破し、研究科をあげて北方研究に取り組もうという意気込みが見てとれよう。同プロジェクトが主導して、同年9月には文学研究科公開シンポジウム「北方的 — 北方研究の構築と展開」を開催した。

この「北方的」というタイトルにも、研究分野や地域を狭く限定・規定せず、ゆるやかな連携のもと、研究科全体として「北方（的なるもの）」を共通項の一つとして意識することで、それにかかわる研究を推進したいという思いが込められていた。皆が同じ方向を目指すとい

うよりは、それぞれのもつ「北方」のイメージにゆだねて、とりあえず出発した感があった。当然、メンバー間に認識の違いや温度差もあったが、代表が頼りないところは栗生澤研究科長（当時）のリーダーシップが補ってくれた。そのお陰もあって、旗揚げとしてのシンポジウムは上々の成功をおさめた。翌年（2007）3月、その報告書を刊行、そこに書いたシンポジウム概要報告（津曲 2007a）は、前年度創刊されたばかりの研究科英文紀要にも翻訳掲載された（Tsumagari 2007）。



写真1 シンポジウムで挨拶する栗生澤研究科長

2 センター立ち上げの年

このプロジェクトとしての活動をふまえ、翌2007（平成19）年4月、文学研究科に北方研究教育センターが設置され、津曲が初代センター長に就任した（2011年3月まで）。他にプロジェクト時のメンバーから5名（池田透、北村清彦、宮武公夫、加藤博文、佐藤知己の各教員）にセンター運営委員を兼務していただくこととした。栗生澤研究科長の肩入れもあって全学運用教員枠での助教採用が認められ、同年10月、森永貴子助教がセンター専任教員として着任し（～2010年3月末で転出）、運営の基盤も整った。ちなみにセンター設置と時を同じくして、北大の共同教育研究施設としてアイヌ・先住民研究センターが設置されたことで、全学的にも北方民族文化への取り組みの基盤が整備され、文学研究科としても足並みをそろえる結果となった。

初年度は、公開講座と3回の講演会を実施し、市民や学生に「北方研究」の一端に触れてもらう機会を設けた。このうち公開講座はセンター教員を中心に「北方を旅する一北をめざした人々」をテーマとして2007年10月から12月にかけて全10回開講した。この講座をもとに、2010年3月北大出版会から文学研究科ライブラリの1冊として、『北方を旅する一人文学でめぐる九日間』が刊行された（北村編著2010、同書書評として笹倉2011）。

以後、公開講座を文学研究科ライブラリとして刊行する先鞭を付けるかたちとなった。講演会のほうはいずれも外部講師を招き、一般に公開した。講演会の共催・後援などのかたちで、上記アイヌ・先住民センターや（津曲が会長を務めていた）北海道民族学会等との連携も積極的に進めた。またこうしたイベント広報や活動報告を目的にホームページを立ち上げ、公開した。

教育面では、初年度、スラブ研究センターとの共同で大学院共通科目「北方の人文学」を開講した。翌2008、2010（平成20、22）年度にはセンター主導で同じく大学院共通科目「北方研究の最前線」を開講している。しかしながら、学際的オムニバス講義が専門教育にはなじみにくいこともあってか当初から受講者数は伸び悩み、とくに「共通科目」が狙いとする研究科外からの院生参加はきわめて少ない状況で、これ以後は実施を見合わせる事となった。

なお、センター設立の経緯と初年度の活動実績については、文学研究科・文学部ニュースにも報告記事がある（津曲2007b）。



写真2 『北方を旅する』表紙

3 『北方人文研究』誌創刊

そのほか初年度に開始した特筆すべき事業として『北方人文研究』誌の創刊（2008年3月）がある。これにはかつての『北方文化研究』誌に代わって、目に見えるかたちでの北方研究の集約と公刊を引き継ぐという意味ももちろんあった。しかし、それに加えて、研究分野や投稿者を狭く限定せず、院生等若手研究者を含む学外者にも門戸を広げ、一方で専門学術誌としての水準確保のために査読制を明確化するなど、多少の新機軸も打ち出したつもりである。さらに北大学術成果コレクション HUSCAP に登録することでネット上からの閲覧も可能となり、世界中に潜在的読者を持ちうる事となった。創刊以後、毎年順調に号を重ね、10号の節目を越えて今11号に入ったことはまことに喜ばしいことであり、これまで編集や査読にあたった関係者や投稿してくださった方々に敬意を表したい。

10号（2017）までの目次を見ると、考古学、歴史学、文化人類学から芸術学まで多岐に渡るが、何と云っても言語学の論考が群を抜いて多い。これには編集にもかかわった津曲と、2010年4月から着任した永山ゆかり助教、さらに2011年度からセンター長に就任（～2013年3月まで）した佐藤知己教授の専門が言語学であったことも無関係ではなからう。とくに第5号（2012）では池上二良教授追悼の特集を組み、第10号は津曲の退職記念号としていただいたことも言語学分野の寄稿を増やす結果となった。

ちなみに津曲は自身が代表を務めた科研（2010～2014年度基盤(B)「北東アジア危機言語の記述と類型に関するネットワーク構築」）の成果刊行を兼ねて『北方言語研究』誌を2011年3月に創刊し、退職の年度まで毎年刊行を継続した（2017年2月、第7号刊行）。次号以

降は他大学の研究者に編集主体をゆだねて受け継がれる予定である。当初から研究者のゆるやかな連携のもとに継続していくことを考えていたので、「北方言語ネットワーク」という、あえて実体を固定しない名称を編集主体に掲げている。『北方人文研究』と並行しながらも、「北方言語」に特化した専門誌として、院生等若手を含む全国の北方言語研究者からほぼ毎号10本を越す論文・資料の投稿を得て、発表と研鑽の場を提供しえたことは当科研の掲げる「ネットワーク構築」を実現し、持続への途を開いたものと考えている。HUSCAP上での公開もあって、(和文雑誌ではあるが)徐々に国際的にも認知されるようになってきており、今後刊行主体が他大学に移ってもHUSCAP登録は継続的に認められる見込みである。

こうしてセンターに基盤を置く『北方人文研究』誌と、北方言語研究者のゆるやかな連携にゆだねられた『北方言語研究』誌が、それぞれの持ち味を活かしつつ継続発展していくことを願っている。

4 言語学関係の公開シンポジウム開催と成果刊行

センター主催のシンポジウムにおいても、言語学をテーマにしたものが続いた。ここでは筆者が企画等でも深くかかわった初期の3つのシンポジウムについて取り上げる。いずれも開催の翌年には報告書や書籍、雑誌特集として成果が刊行されたことも特筆すべき点である。

まずセンター2年目の2008年9月には、公開シンポジウム「サハリンの言語世界」を開催した。外国人研究者1名を含む学内外13名の研究者による発表が行われ、多くの一般聴衆の参加を得た。サハリン先住民言語(アイヌ語、ウイльта語、ニヅフ語)のおもだった国内専門家が一堂に会したのは画期的なことである(報告記事として山田2009)。翌年3月には報告書を刊行、HUSCAPにも登録した(津曲編2009)。

2009年2月には、北文学部教授であったアイヌ語学者知里真志保生誕百年を記念したシンポジウム「知里真志保一人と学問」を開催した。センター教員を含む5名の研究科教員による業績の再評価と展望に続いて、2名の招



写真3 『北方人文研究』創刊号表紙

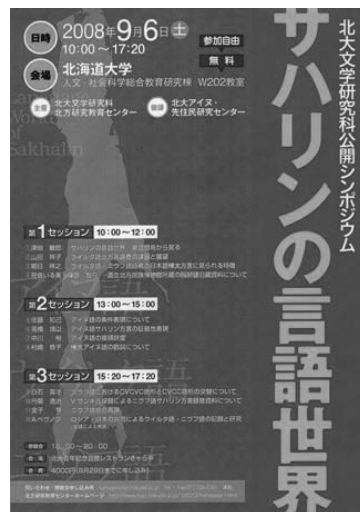


写真4 「サハリンの言語世界」ポスター

待講演者による人物像の紹介もあり、180名にも及ぶ多数の聴衆から好評を博した（佐藤2010による報告記事がある）。このシンポジウムの成果は、翌年3月センター編の一般書籍として北大出版会から刊行された（北海道大学北方研究教育センター編2010、書評として田村2011）。なお、当シンポジウムの開催と書籍刊行には研究科からの補助金が得られた。

2011年7月に、文学部言語学講座を長く担当し、北方文化研究施設の牽引役でもあった池上二良名誉教授が亡くなられたのを受け、同年12月、追悼シンポジウム「北方言語研究の歩み」を開催した。二部構成とし、第一部「北方言語研究の最前線」では先生に直接・間接に指導を受けた北方言語研究者4名が各専門分野に関する研究発表を行なった。第二部「池上先生の北方言語研究」では、北方言語学の先駆者として研究教育に多大な貢献をされた池上先生の業績について満洲語学、ウイラタ語学、ツングース語学、アイヌ語学それぞれの観点から専門家が再評価した。これらは『北方人文研究』第5号（2012）の特集としてまとめられたが、あらたに海外からの寄稿も加え、また池上先生の著述目録や言語学概論ノートも収録したことで厚みのある号となった。

5 センターのこれから

その後も大小さまざまなシンポジウム、講演会、フォーラム等が活発に行われ、その中でも言語学関係のものが目立つが、こうしたセンター活動の企画・運営には2010年度から着任した永山助教の寄与するところが大きい。とくに市民を対象に研究科大学院生の研究を紹介する「ツンドラカフェ」（2011年6月第1回～2015年7月第10回）では、言語学に限らず、広範囲の「北方」にかかわる話題が、お茶を飲みながらの双方向的なやり取りをモットーに取り上げられた。残念ながら諸般の事情でしばらく「休業中」のようだが、こうしたサイエンスカフェのかたちで市民レベルへの浸透をはかることは、今後さらに展開が期待される。

センター活動の今後にとって、もう一つ筆者が可能性を感じているのは博物館との連携および展示の活用である。これには筆者が2011（平成23）年度から4年間、総合博物館の館長を兼務したという個人的事情も無縁とは言えず、いささか我田引水の感をまぬがれないが、研究科内でも博物館学への関心と需要が高まっているおり、これを利用しない手はないと考える次第である。すでにこれまでもセンターとして展示活動はいくつか実施してきた。

手始めは文学部1階ロビー「書香の森」における展示で、2011年4月から6月にかけて「北方スタイル～シベリア先住民アートの世界」をカムチャッカ編、サハリン編、ロシア沿海地方編の3部に分けて実施した。同じタイトルの展示を、2014年4～5月には北大インフォメーションセンター「エルムの森」で、また同年8月には札幌市地下歩行空間「チカホ」における「北大文学研究科のフィールドワーク」紹介の一環として行っている。展示資料はほとんど、研究者としてフィールドで個人的に集めたものがもたっていて、点数は多くないが、色彩豊かで巧みな造形美の北方先住民アートをとおして、学生や市民に北方への関心を誘い、また伝統と現代の調和を感じ取ってもらおう効果があったと考えている。

さらに道立北方民族博物館との連携事業として、同館の移動展のかたちで2012年4～5月には「北にくらす子どもたち」、2014年7月には「忘れられた歴史のページ：20世紀サハリン先住民の暮らし」と題した写真展を北大ファカルティハウス「エンレイソウ」ギャラリーで開催した（ともに北大総合博物館の後援）。このような連携により、博物館としては展示を一度限りで終わらせず、各地でより多くの人に見てもらえるメリットがある。一方、展示できる手持ち資料に限られているセンターとしても、目に見えるかたちで「北方」を対外

的にアピールするチャンスとなる。

2015年4月から北大総合博物館が耐震改修工事に伴う長期休館に入り、これを機に大幅な展示リニューアルが計画された。その目玉の一つとして各学部による展示室の設置が打ち出され、文学部としても対応を迫られた。文学部での教育システムや文学研究科の多岐に渡る研究を概略的に紹介する一方で、いくつかの重点的研究を取り上げる際に「北方研究」は外せないことについて研究科の理解も得られ、センターとしても津曲と永山助教を中心に展示作成に積極的にかかわることとなった。津曲は館長時代からすでに北方文化常設展示の新設について提案・準備を進めていた経緯もあり、それを文学部展示の一部として実現するかたちとなった。他にセンター所属の池田透教授の外来動物研究が「学部一押し研究」の展示に取り上げられ、また新たにセンターに加わった立澤助教のフィールドであるサハの文化もクローズアップされることになった。実際の展示制作作業には、博物館学を担当する佐々木亨教授の指導のもと、同研究室の院生諸君が活躍したが、このことは学生・院生教育の場としての博物館の可能性を示すものでもある。ともあれ、センターも深くかかわるかたちで文学部展示室ができたことは、センターとしても意義深いことである。

2016年7月の全館リニューアル・オープンからすでに1年半を過ぎ、そろそろ展示の見直しや入れ替えを考える時期に近づいているが、今後も展示や関連イベントなどでセンターが関与を保つことは、学内に外部への窓口を確保する一つ的手段として有効であろう。さらに学内に限らず、外部の博物館等とも連携の機会を探ることで、「北方」の輪郭が広がり、センター活動のアピールにつながることを期待したい。



写真5 総合博物館文学部展示室の一角

参考文献

- 北海道大学北方研究教育センター編（2010）『知里真志保：人と学問』札幌：北海道大学出版会。
- 北村清彦編著（2010）『北方を旅する：人文学でめぐる九日間』札幌：北海道大学出版会。
- 笹倉いる美（2011）「〈書評〉北村清彦（編著）『北方を旅する：人文学でめぐる九日間』」『北方人文研究』4：95-97。
- 佐藤知己（2010）「『生誕百周年記念シンポジウム 知里真志保：人と学問』開催報告」『北方人文研究』3：77-79。
- 田村将人（2011）「〈書評〉北海道大学北方研究教育センター編『知里真志保：人と学問』」『北方人文研究』4：99-103。
- 津曲敏郎（2007a）「北方研究の構築と展開：文学研究科公開シンポジウム概要報告」〈北方研究の構築と展開〉プロジェクト編『北大文学研究科公開シンポジウム：北方的—北方研究の構築と展開』：114-117。北海道大学大学院文学研究科。
- 津曲敏郎（2007b）「「北方研究教育センター」の設立」『文学研究科・文学部ニュース』51：41-42。北海道大学大学院文学研究科，2007年12月。http://www.let.hokudai.ac.jp/archive/bungaku_news/news51.pdf
- Tsumagari, T. (2007) The establishment and expansion of northern studies: Graduate School of Letters Open Symposium Report. *Journal of the Graduate School of Letters* 2: 59-64.
- 津曲敏郎編（2009）『サハリンの言語世界：北大文学研究科公開シンポジウム報告書』北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター。
- 山田祥子（2009）「〈講演会等報告〉北大文学研究科公開シンポジウム「サハリンの言語世界」」『北海道民族学』5：70-73。